2015年11月14日（土）　インド大使館　ウパニシャッド（第６回）

前回（第５回、2015年8月22日）は、Mahā-vākya（マハーヴァキャ）（偉大な言葉）を説明しました。

**Mahā-vākya（偉大な言葉）**

１．Prajnānam Brahma（プラッギャーナム・ブラフマ）

意味：意識はブラフマンです

２．Aham Brahmāsmi （アハム・ブラフマースミ）

　　　意味：私はブラフマンです

３．Tattwa masi （タットワ・マスィ）

　　　意味：あなたはそれ（その存在、ブラフマン）です

４．Ayamātmā Brahma（アヤマートマ・ブラフマ）

 　 意味：この魂（アートマン）はブラフマンです（これはそれです）

今日はQuotations from the Upanishads（ウパニシャッドからの引用句）のプリントを配布します。それに沿って説明します。

**ウパニシャッドからの引用句**

前回、ムンダカ・ウパニシャッドからの引用句を説明し始めました。ブラフマンを説明する言葉です。配布したプリントを見ながら進みます。（以下の丸付き数字はプリント中のものと同じです）

⑧　yattad adṛesyam agrāhyam agotravarṇam

（ヤッタッド　アドレャッシャム　アグラーヒヤム アゴートラヴァルナム）

　　　意味：或るものは見ることができない、つかむことができない、支配することもできない、源も原因も性質もない

acakṣuḥ śrotram tat apāṇipādam /

（アチャクシュㇷ　シュロートラㇺ　タット　アパニーパーダㇺ）

　　　意味：目もない、耳もない、手もない、足もない

　　nityam vibhum sarvagatam susūkṣmam tat avyayam

（ニッティヤㇺ ヴィブㇺ サルヴァガタㇺ ススークシュマㇺ タット アヴィヤヤㇺ）

意味：永遠、遍在、すべての中に入っている、精妙よりも精妙、衰えていない

yat adbhutayonim paripaśyanti dhīraḥ

（ヤット　アドブタヨーニㇺ　パリパッシャンティ　ディーラㇵ）

　　　意味：賢い人はそれを悟っています

これらの句はムンダカ・ウパニシャッド（Mundaka Upanishad）にあります。「ウパニシャッド／日本ヴェーダーンタ協会／2011年11月21日第2刷発行」のp.87、5～8行も参照して下さい。

これらの句にはブラフマンの性質を否定的に説明するものと肯定的に説明するものとの両方があります。否定的な説明では「～ではない」という形になっています。仏教の真理の言葉はほとんどが「～ない、～ない」（否定形）ですね。ウパニシャッドでは、否定的な説明とともに肯定的な説明もありますのでその点で仏教の言葉との間には違いがあります。

少しずつ見ていきましょう。まず、yattad adṛesyam agrāhyam agotravarṇam です。Yattadの意味は、「或る存在」です。adṛesyamの意味は「見ることができない」ですが、この表現はシンボル的であり、見ることも聞くことも触ることもできない、すなわち、認識の器官で認識することができないことを表しています。agrāhyamの意味は「つかむことができない、支配することもできない」です。agotravarṇamの意味は「源も原因も性質もない」ですが、性質については、例えば、厚くもない薄くもない、短くもない長くもない、低くもない高くもない、黒くもない白くもない、と説明されています。これらは否定形による説明です。

次は、acakṣuḥ śrotram tat apāṇipādamです。acakṣuḥ śrotramの意味は、「認識器官もない」です。前の句では、認識することができないと説明されていました。acakṣuḥは目で、śrotramは耳です。目と耳だけではなく、舌もなく鼻もなく皮膚もないことを意味しています。apāṇipādamは、働きの器官もないことを意味します。働きの器官とは例えば足、手、発話器官、生殖器官です。

なぜこれらがないのでしょうか。もし、これらがあるとすれば見ることができつかむことができ性質があることになります。そして認識することができることになりますが認識する対象は時間と空間で限定されたものです。性質があるものも時間と空間で限定されているものですね。ブラフマンは永遠・無限であり時間と空間で限定されたものではないですから、これらには該当しません。

これら２つの句は否定的な説明でしたが、次はブラフマンの性格（nature）の肯定的な説明です。

それがnityam vibhum sarvagatam susūkṣmam tat avyayamです。nityamは「永遠」を意味しますので、ブラフマンは時間で限定されたものではないと説明されています。悟らないとブラフマンの性格を理解することはできません。我々は悟っていませんし、突然に悟ることはできませんから悟るための準備が必要であり、その準備の一つが勉強です。そして勉強のために、言葉を使って間接的にブラフマンを説明しています。ブラフマンの性格を直接に理解することは悟らなければできませんから。

例えば、インドのバラナシ（ベナレス）がどこにあるのかを案内（説明）するには、ガンジス川をヒマラヤから下って左側にある町の一つがバラナシであるというように道順を示さないと理解できません。聖典の目的はみな同じでこのように目的地にたどり着くための説明です。言葉もヴェーダも物質です。言葉は真理ではありません。本当の真理は言葉で説明することができないです。しかし、言葉を使わないと真理のことを理解することができませんし実践することもできません。実践できないと真理を悟ることができません。そのためにヴェーダは言葉を使ってブラフマンを説明しています。

我々はnityam（永遠）の経験はないです。経験があるのは一時的なものです。永遠は一時的ではないものですがそれは悟らないとわかりません。nityam（永遠）という言葉も相対的な言葉であり、anityam（一時的）に対する言葉として使っています。悟りますと本当はそれは一時的でもない、永遠でもない、ということがわかります。無限でもない、有限でもない。それが真理です。悟らないとわかりません。理解のために、我々の経験している一時的なもの、有限なものの反対のものとして永遠なもの、無限なものとしてブラフマンを説明しているのです。

vibhumは「遍在」を意味します。どこにでもあるということですね。普通のものは或る場所にありますが或る場所にはないです。しかしブラフマンはすべての場所にあります。

sarvagatamは「すべてのものの中にブラフマンはある」という意味です。アカーシャのようです。アカーシャはエーテルであり、エーテルはすべてのものの中に入っています。部屋の中にも体の中にも入っています。アカーシャ（エーテル）はとても精妙ですがそれよりももっと精妙なのがブラフマンです。アカーシャ（エーテル）の中には自分の存在はありません。エーテルがあるのはブラフマンがあるからです。エーテルも本当は物質であり、そのベース（基礎）はブラフマンです。ブラフマンはアカーシャ（エーテル）よりもっと精妙にすべてのものの中に入っています。susūkṣmamの意味は「精妙よりも精妙」であり、そのことを言っています。

avyayamは「衰えていない」ということを意味します。物質だけが衰えています。物質は始まります、存在しています、衰えています、なくなります。ブラフマンは意識であって物質ではありませんから衰えていませんし、なくなりません。ブラフマンには部分もありません（永遠・無限ですから）が物質には部分も性質もあります。

次の句は、yat adbhutayonim paripaśyanti dhīraḥ です。adbhutayonim のyonimの意味は「膣」です。「源」ということです。adbhutaは「特別な」という意味ですから、adbhutayonimは「特別な膣」ということになります。それの意味するのは、「宇宙の源」ということです。宇宙の源がブラフマンであることを説明しています。

paripaśyanti dhīraḥのdhīraḥ（ディーラㇵ）の意味は、「賢者、悟った人」です。賢者、悟った人は心も知性も清らかです。科学者の知性に対して清らかとはあまり言いませんね。普通の知性は幻惑（delusion）された知性です。科学者の心に純粋さは必要とされません。真理の勉強には清らかで純粋な心と知性が必要です。高いレベルの科学者であっても心の中にたくさんの欲望（名声欲、嫉妬、貪欲）がけっこうあります。アインシュタインは科学者ですが純粋な心の聖者のようでした。しかし、科学は物質についての勉強ですから心が純粋であることは要求されません。真理の勉強のために純粋な心と知性が必要な理由は、心は普通、否定的な感情と心の汚れによって限定されているからです。ところが真理そのものは限定されたものではないです。ですから、怒り、欲張る、欲望、執着などがありますと心は限定されたものとなりますので、限定されたものではない真理の勉強はできません。そのために心のコントロール、身体のコントロール、感覚のコントロールが必要であると言っています。パタンジャリのヨーガスートラの中にヤマ・ニヤマがあります。ヤマ・ニヤマはヴェーダーンタのシャマーダマ（shama-dama）と同じです。

賢者、悟った人は心も知性も清らかにし、集中して真理のことを考えて悟りました。心・知性が清らかだけでは悟れません。真理のことを集中して考えないと悟れません。そして悟った人はdhīraḥです。一時的と永遠の違い、有限と無限との違いも識別して悟りました。

paripaśyantiのpaśyantiの意味は「見る」です。paripaśyantiの意味は「特別に見る」ということです。例えば深く見るということですが、それは悟るということです。ブラフマンを悟ります。つまり、dhīraḥ（賢者）は、ブラフマンが「adṛesyam agrāhyam agotravarṇam、acakṣuḥ śrotram tat apāṇipādam、nityam vibhum sarvagatam susūkṣmam tat avyayam、yat adbhutayonim」であるということを理解しています。普通の人にはそのような理解はできません。

次はプリントの⑨です。

⑨　yathā ūrṇanābhiḥ sṛjate gṛhnate ca /

（ヤター　ウールナナービㇶ　スリジャテー　グリンナテー　チャ）

　　　yathā pṛthivyām oṣadhayaḥ saṃbhavanti /

　　（ヤター　プリティッヴヤーㇺ　オーシャダヤㇵ　サムバヴァンティ）

　　　yathā śataḥ puruṣāḥ keśalomāni /

　　（ヤター　シャタㇵ　プルシャーㇵ　ケーシャローマーニ）

　　　tathā akṣarāt saṃbhavatīha viśvam

　　（タター　アクシャラート　サㇺバヴァティーハ　ヴィシュヴァㇺ）

これらの句はムンダカ・ウパニシャッド（Mundaka Upanishad）にあります。「ウパニシャッド」（前出）のp.87、9～10行も参照して下さい。

これらの句の中ではブラフマンについて３つの例を使っています。

一つはクモとクモの巣の例です。まず最初の句のyathāは、「そのように」という意味です。ūrṇanābhiḥ（ウールナナービㇶ）は「クモ」という意味で、クモは臍の中に巣（を作る糸）があります。sṛjate（スリジャテー）は、「糸が出て巣を作っている」という意味です。gṛhnate（グリンナテー）は、「巣を収める」という意味です。

もう一つの例がyathā pṛthivyām oṣadhayaḥ saṃbhavantiです。pṛthivyām（プリティッヴヤーㇺ）の意味は「土」です。oṣadhayaḥ（オーシャダヤㇵ）の意味は「植物」です。土から植物が生じるという意味です。

次がyathā śataḥ puruṣāḥ keśalomāniです。人の身体から髪と毛（keśalomāni）が出ているという意味です。

最後の句はtathā akṣarāt saṃbhavatīha viśvamです。tathāは「そのように」、akṣarātは「ブラフマンから」、saṃbhavatīhaは「出ています」、viśvamは「この宇宙」という意味で、「そのようにブラフマンからこの宇宙が出ています」、という意味です。「そのように」というのは、クモから巣、土から植物、人の身体から髪と毛が出ているようにということです。

以上がブラフマンについての３つの例でした。すなわち、クモと巣、土と植物、人体と髪毛です。

クモと巣について説明します。皆さん、質量因（material cause）と動因（efficient cause）ということはわかりますか。例えば、机を作るために必要なものは何でしょうか。木材と大工さんですね。そのように、すべてのものはそれを作るために２つの要因（factor）が必要です。質量因が材料で動因は作る人です。

面白いのは、クモは巣を作る糸を自分の中から出しています。鳥は巣を作るのに外から材料を運んできます。鳥が動因で巣の材料が質量因です。クモは巣を作るのに外のものを何も使っていません。自分の中から出しています。クモの巣は質量因と動因が同じです。昔の聖者は自然をよく観察してそのような特別な例を見つけました。

ブラフマンも宇宙を創るのに自分の中から出しています。ブラフマンは自分以外のものから宇宙を創っていません。自分の中から出しています（projection）。クモの巣と同じように同じ存在が質量因と動因になっています。それが非二元論的な特徴です。二元論的にはプラクリティとプルシャがあって、プラクリティを使ってプルシャが作っています。

次は、土と植物について説明します。先ほど、土から植物が生じているという句を見ました。この句のポイントは何でしょうか。植物の基礎は土ですね。同じように、宇宙の基礎はブラフマンです。土がないと植物が出ないように、ブラフマンがないと宇宙は現れません。

次がyathā śataḥ puruṣāḥ keśalomāniです。puruṣāḥが「生きている人」、śataḥが「身体」、keśalomāniが「髪と毛」ですから、「生きている人の身体から髪と毛が出ている」という意味になります。身体の部分には手や足もありますが、髪と毛も身体の部分ですね。同じ体の部分であっても手や足は痛みを感じますので意識があるように思えます。ところが髪と毛は切っても痛くないので意識がないです。

宇宙はブラフマンから出ていますけれど、宇宙は物質であり意識はないです。人の髪と毛のようです。

ブラフマンから最初にマーヤーとプラクリティが出ています。プラクリティから宇宙が出ています。宇宙が出ますとその中に３つのグナ（サットワ、ラジャス、タマス）があります。ブラフマンから出たものはブラフマンに入ります（戻ります）。ブラフマンから出るのが創造であり、ブラフマンに入る（戻る）のが破壊です。そのプロセスは創造、維持、破壊ですが、ブラフマンはそのプロセスの傍観者のようです。そのプロセスからブラフマンは何も影響を受けません。ラーマクリシュナは次のような例で説明なさっています。

　「蛇の中に毒があるが、蛇にはその毒の影響は何もない」

次はプリントの⑩です。

　⑩　brahmaivedam amṛtam purastāt /

　　（ブランマイヴェーダㇺ　アムリタㇺ　プラスタート）

　　　brahma paścād brahma dakṣiṇataḥ ca uttarena /

　（ブランマ パシュチャード ブランマ ダクシナタㇵ　チャ　ウッタレーナ）

　　　adhasca ūrdhanca prasṛtam /

　　（アダスチャ　ウールダンチャ　プラスリタㇺ）

　　　brahmaivedam viśvamidam variṣṭham

　　（ブランマイヴェーダㇺ　ヴィシュヴァミダㇺ　ヴァリシュタㇺ）

これらの句はムンダカ・ウパニシャッド（Mundaka Upanishad）にあります。「ウパニシャッド」（前出）のp.93、8～10行も参照して下さい。

amṛtam（アムリタム）の意味は「不死」です。purastātは「前」、paścādは「後ろ」、dakṣiṇataḥは「南」、uttarenaは「北」、adhaは「下」、ūrdhaは「上」、brahmaivedamは「ブラフマンはすべての場所に広がっています」、viśvamidam variṣṭhamは「この宇宙は一番偉大なものです、例えば、ブラフマンです」という意味です。

ブラフマンは永遠であり、なくなりません。ブラフマンは遍在ですが、ここではそのことが「ブラフマンは前、後ろ、左、右…」と描写されています。そのような詳細な描写は瞑想のためのものです。「遍在」をイメージすることは難しいですから、イメージしやすくするためにそのように説明されています。

ブラフマンは形がないですから、「意識」の瞑想はとても難しいです。「意識」だけを瞑想するのは最も高いレベルの瞑想です。「意識」は永遠ですから。普通の瞑想の対象（シンボル）は時間と空間とで限定されたものです。神の化身も時間と空間で限定されたものです。シヴァ、ブッダなど、みなそうです。「純粋な意識」だけが永遠です。すべての神の本当の姿は意識であり永遠ですが、神が現れた姿は一時的です。

ですから「純粋な意識」の瞑想のためにブラフマンについて何回も何回も説明しています。その助けがないとなかなか瞑想はできないからです。沐浴のときに、頭まで水につかることを想像してみて下さい。上も水、下も水、左も水、右も水、前も水、後ろも水、それをイメージして下さい。ブラフマンの瞑想のときもそのようにします。ブラフマンは私の中、外、右、左、前、後ろ、上、下、すべてブラフマンであるとイメージして下さい。

viśvamidam variṣṭhamは、「この宇宙は一番偉大なものです」という意味ですが、どうして偉大なのでしょう。その宇宙の中にブラフマンがいるからです。宇宙の基礎はブラフマンですね。そのことを考えれば、この宇宙はとても偉大なものです。ブラフマン以外に宇宙の存在はないです。

そのことをどのように理解しますか。宇宙は一時的なものですが、宇宙の基礎はブラフマンであり永遠です。例えば、縄を見てそれを蛇と誤認することがありますが、それは無知の影響で縄を蛇と重ね合わせた結果です。無知の結果（蛇）は誤りですが無知の基礎（縄）は正しいです。この例で蛇と誤認した基礎となっていたものは縄であり、縄は正しいです。縄がないと無知も生じないです。また、例えば、砂漠の蜃気楼を考えて下さい。蜃気楼は無知の影響で出ていますが、蜃気楼の基礎である砂は正しいです。

そのように考えると、宇宙は一時的ですけれども、宇宙の基礎であるブラフマンは実在です。宇宙は非実在です。しかし、実在がないと非実在もないです。非実在は一時的であり、実在は永遠です。それは識別するとわかります。先ほどの例のように、重ね合わせたものが一時的です。基礎は正しいものであり、永遠です。先ほどの例で言えば、縄が実在であり、蛇は非実在です。

宇宙は、ブラフマンに重ね合わせられて宇宙が出ています。本当はブラフマンですが、無知の影響でマーヤーの影響で我々は宇宙を見ています。本当は宇宙はないです。識別して、重ね合わせたもの（非実在）がなくなりますとブラフマンだけが残ります。そのように、基礎だけは正しいです。重ね合わせたものは正しくないです。ブラフマン以外に宇宙の存在はないです。そのように考えると宇宙はとても偉大なものです。

次はプリントの⑪です。

　⑪　sarvataḥ pāṇipādam tat sarvatokṣi śiromukham

　　（サルヴァタㇵ パーニパーダム タット　サルヴァトークシ　シロームッカム）

　　　sarvataḥ śrutimalloke sarvamāvṛtya tiṣṭhati

　　（サルヴァタㇵ シュルティマローケー サルヴァマーブリッティヤ ティシュタティ）

これらの句はシュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャッド（Śvetaśvatara Upanishad）にあります。「ウパニシャッド」（前出）のp.236、6～7行も参照して下さい。

面白いことにこの句と同じ内容が、バガヴァッド・ギーターの１３章１４節にあります。ウパニシャッドが牝牛でありギーターは牛乳の関係にあるからです。

sarvataḥの意味は、「どこでもあらゆるところ」、pāṇipādamの意味は、「ブラフマンの手と足」ですから、sarvataḥ pāṇipādamは、「どこでもあらゆるところにブラフマンの手も足もあります」という意味です。すべての生き物の手はブラフマンの手であり、すべての生き物の足はブラフマンの足です。

tatの意味は「そのもの」、sarvatokṣiの意味は「すべての場所」、śiromukhamの意味は「頭と顔」ですから、tat sarvatokṣi śiromukhamは、「ブラフマンの頭と顔はどこにもあります」という意味です。同じように、すべての生き物の頭と顔はブラフマンの頭と顔です。

sarvataḥの意味は「どこでも」、śrutiの意味は「耳」です。「すべての生き物にはブラフマンの耳があります」という意味です。sarvamāvṛtya（sarvam – āvritya）は、「すべてのものに遍在しています」という意味です。

すべての生き物、すべてのものはブラフマンです、と言っています。そのことがなぜ理解できないかというと、我々は無知の影響で宇宙（人やもの）を見ているからです。人同士の間、もの同士の間では何が違いますか。名前と形です。サンスクリット語で示すと、以下の通りです。

　Nama = 名前

　Rupa = 形

名前と形で人やものは別々に見えますけれど、識別して名前と形を取り除きますとそれらの基礎であるブラフマン（意識）が残ります。もちろん、詳しく見れば、名前と形の関係で性質や仕事にも違いがあります。名前と形が別々に見えるのは無知の影響です。無知がありますからブラフマンが見えませんが無知がなくなりますと見えます。

例えば、黄疸のときは、ものが黄色く見えますね。その病気が治れば本当の色が見えます。無知の影響で別々に見えるのと同じことです。サマーディに入りますとすべてがブラフマンであることを理解することができます。

札幌の雪まつりで展示される雪で作った作品にはそれぞれ名前と形があります。何年か前にはタージマハルが作られたことがありました。すべて雪で作られています。そのことがわかるのには瞑想は要りませんが、すべてがブラフマンであるということを理解するための例になります。悟った後にはすべてのものがブラフマンであるということがわかります。

悟った人はサマーディの後に戻ってもすべてのものがブラフマンであるという知識はなくなりません。その知識はなくなりませんから、欲望も執着も幻惑も出ていません。我々は名前と形でものや人が別々に見えます。そして我々は執着や怒りや幻惑が出ています。普通の人と悟った人と見方はそのように違います。悟った後でも別々の名前と形は見えます。そうでないと普通に仕事や会話はできませんから。しかしすべてのものの本性はブラフマンであるという知識はなくなりません。